

大学共同利用機関法人自然科学研究機構
教育研究評議会（第35回）議事要旨

1. 日 時 平成25年3月28日（木）10：45～13：30
2. 場 所 自然科学研究機構事務局会議室
3. 出席者 佐藤議長、井上評議員、郷評議員、小間評議員、笹月評議員、佐藤（哲）評議員、廣田評議員、木下評議員、林評議員、岡田（清）評議員、岡田（泰）評議員、大峯評議員、金子（修）評議員、山森評議員、井本評議員、小杉評議員
（陪席者）
武田監事、竹俣監事
（事務担当者）
増田事務局次長、亀原総務課長、新地企画連携課長、長谷川財務課長、国立天文台佐藤事務部長、核融合科学研究所川畑管理部長、岡崎統合事務センター穴沢事務センター長及び樋口財務部長 他
（研究成果発表者）
渡辺 英治 准教授（基礎生物学研究所）
4. 配付資料
 - 1 教育研究評議会（第34回）議事要旨（案）
 - 2 平成25年度予算（案）の内示について
 - 3-1 大学共同利用機関法人自然科学研究機構年度計画（平成25年度）（案）
 - 3-2 大学共同利用機関法人自然科学研究機構中期目標・中期計画・年度計画 一覧表
 - 3-3 平成25年度自然科学研究機構予算編成方針の平成25年度年度計画予算への反映状況
 - 3-4 各機関ごとの予算状況
 - 4-1 平成25年度分子科学研究所の組織改編（案）について
 - 4-2 組織運営通則の改正について（案）
 - 4-3 自然科学研究機構組織運営通則 一部改正（案） 新旧対照表
 - 5 新分野創成センター宇宙における生命研究分野の創設について（案）
 - 6 大学共同利用機関法人自然科学研究機構外部評価報告書
 - 7 自然科学研究機構 第1回 N I N S C o l l o q u i u m
 - 8 第14回自然科学研究機構シンポジウム 分子が拓くグリーン未来
 - 9 第2回自然科学研究機構若手研究者賞授賞式及び記念講演会について
 - 10 平成25年度 教育研究評議会の開催日程審議終了後回収 名誉教授関係資料

5. 議事等

議事に先立ち、定足数並びに配付資料の確認があった。

1) 前回議事要旨（案）について

前回教育研究評議会（第34回）議事要旨（案）（資料1）が了承された。

2) 平成25年度予算（案）の内示について

事務局から、資料2に基づき、本機構の平成25年度予算（案）の内示について説明があった。

（主な意見等は以下のとおり）

- 研究設備に予算が措置されたことは大変よい。資料の2ページ目に特殊要因運営費交付金の退職手当が平成23年度末時点における退職手当予算不足相当額の2分の1相当額を加算とあるが、残りの2分の1は自己負担になるのか、それとも国から措置されることになるのか、どのような措置か伺いたい。
- 退職手当は、特殊要因運営費交付金として国から全額措置される。第二期中期計画期間中は、6年分の総額の1/6を毎年、特殊要因運営費交付金として措置するとなっているため、平成25年度に特殊要因運営費交付金の不足分を機構内で措置するものであるが、後から文部科学省から補填される。

3) 平成25年度年度計画（案）について

事務局から、資料3-1から資料3-4に基づき、平成25年度年度計画（案）について説明があり、審議の結果、案のとおり了承された。

（主な意見等は以下のとおり）

- 生理学研究所の超高磁場機能的磁気共鳴画像装置（7T-fMRI）について、他大学にも同じような設備があるが、どのような関係にあるのか伺いたい。
- 同クラスの設備は、他大学にも整備されている。現在、複数の大学と情報交換を行い、共通的な目標に向かって人員を配置するような概算要求を行いながら連携を図っていく方針である。生理学研究所は、脳だけでなく全身の微細形態について研究を行い、他の大学との目的の違いを明確にしながら展開していく。
- 国立天文台のTMT計画は国際的な研究計画であるが、参加する各国のTMT計画に対する現在の進捗状況について伺いたい。
- まず、米国カリフォルニア州（カリフォルニア工科大学とカリフォルニア大学）は、ムーア財団から3億米ドルの寄附を受け、事前の準備を実施している。次にカナダ（産業省が担当）は、準備の段階で資金を提供しているが、建設予算に関しては、2014年4月建設開始を目指して概算要求をするところである。それからインド（文部科学省のような機関が担当）は、担当大臣がクリントン前国務長官と会談したおりに、1.4億米ドルの建設予算を抛出すると約束している。次に中国は、現時点でははっきりとしておらず懸念されるところである。次に米国政府（NSF）は、米国全体の経済が非常に良くないために、今後の10年計画の中に1位に掲げている大型シノプティック・サーベイ望遠鏡（Large Synoptic Survey Telescope:

LSST) を 2014 年から進めるとしている。TMT に関して NSF から資金が提供されるのは 2020 年と聞いている。TMT の建設は、2014 年から 2022 年まで予定されているので、最後の時期に必要なところに資金を拠出するようになっていく。現在の進捗状況としては、カリフォルニア、インド、日本が資金の目途がたったところで、カナダは、ドームとインフラの整備を行う非常に重要なポジションであるので、概算要求について注目している。米国政府に関しては、元々早期の支出は難しいということで建設終盤に予算を拠出するというようになっており、全体の計画に支障はない。

4) 分子科学研究所の組織改編について

大峯評議員から、資料 4-1 に基づき、分子科学研究所の組織改編について説明があり、続いて事務局から、資料 4-2 及び資料 4-3 に基づき、分子科学研究所の組織改編に伴う組織運営通則の一部改正について説明があり、審議の結果、案のとおり了承された。

(主な意見等は以下のとおり)

- 大変魅力的な取組みと思われる。改組ということだが、拡大する部分の比率はどれくらいか。
- 分子科学研究所は、もともと研究者の流動性の高い組織であり、直近の 3 年間で 80 名のうち 32 名が異動している。この流動性を利用しながら、研究者が既存の 4 部門から新設する協奏分子システム研究センターへ併任として参加し、目的を持って研究に従事していくことを想定している。分子科学の新しい方向を見つけようとするための改編である。
- かなり大きな改組になるが、既存の部門の人数は減るのか。
- 既存の部門の人数は減ることになるが、既存の部門に所属する職員も分野を横断した考えのもとに、新たな組織に併任で参加することになる。次世代を担う人材養成のために若手独立フェローは増加する部分である。

5) 新分野創成センター宇宙における生命研究分野の創設について

岡田(清)評議員から、資料 5 に基づき、新分野創成センターに宇宙における生命研究分野を創設することについて説明があり、審議の結果、案のとおり了承された。

6) 名誉教授の称号授与について

事務局から、機構の名誉教授に関する称号授与に関する関係規程の説明があった後、審議後回収資料に基づき、名誉教授称号の授与候補者の所属する機関の評議員から説明があり、審議の結果、案のとおり了承された。

7) 自然科学研究機構外部評価について

事務局から、資料 6 に基づき、昨年 11 月と 12 月に実施した機構の外部評価に

ついて報告があった。

(主な意見等は以下のとおり)

- 新しい研究分野を立ち上げることは、とてもいいことである。そしてその際には、人材を広く求めてもらいたい。世界的にも女性の力を基礎研究でも応用研究でも生かしていくことが、特に少子化の今の時代は、求められている。留学生を受け入れること、また、異分野を融合させることの一環として行ってほしい。多くの国立大学でも女性枠を設けて女性研究者を採用している。男女共同参画のポジティブアクションもこういった新しい分野を立ち上げる際に、国内国外問わず、広く募集をかけることが大事ではないか。
- 機構では、男女共同参画のアクションプランを作成し、年度ごとに行程を確認している。ポジティブアクションについて平成26年度に実施する計画であったが、平成25年度に実行できるよう努力することとした。男女共同参画推進委員会では、更に積極的なアファーマティブアクションに取り組み、例えば、外国人を含めて公募を広く求めていくといった体制も今後考えていきたい。
- 今回の外部評価の結果について、機構内においてどのように対応、取り組みを行ったのか伺いたい。
- まさにこれから機構内で取り組んでいくべき課題を示していただいたものと受け止め、改善に向けて取り組んでいく。
- 今回の外部評価は、いわゆる自己点検といった要素があるが、自分たちの活動を再確認する意味で、非常に重要なことだと考えている。外部評価報告書としてまとめただけでなく、今後の機構の運営に積極的に活用するようにお願いしたい。

8) NINS Colloquiumについて

岡田(清)評議員から、資料7に基づき、2月5日(火)から2月7日(木)に開催したNINS Colloquiumについて報告があった。

(主な意見等は以下のとおり)

- このような取り組みは他大学でも開催しているものか、あまり聞かない。本来、大学がアカデミアとしてやるべきことだと発言してきているのだが、今回、自然科学研究機構で開催されたことが、モデルケースになるのではないか。
- いわゆる文理融合ということがあるが、機構ではそこまではできない。しかし、「自然科学は一つ」とあるという考えから、今回の企画を行った。自然科学に携わる研究者が、自分の分野だけでなく、他の分野を知ること、そして広い視野を持つてほしいと考えている。
- 成果主義というか、セル、ネイチャー、サイエンスに掲載されることだけを目標に若者が研究を行うようになってきていると懸念している。総合力を養うために非常によい企画だと考える。
- 資料6のプログラムを見ると、講演者には男性しかいない。女性がいないということだけを言いたいのではないが、こういう機会に発表する者は、女性を1~2名は必ず入れるといった取り組みをしてほしい。参加者に女性が含まれているとはいえ、このように資料となった際に、男性ばかりであると、将来このような発表者の中に

女性は入ってはいけないのだなと感じてあきらめてしまうことがある。

9) 自然科学研究機構シンポジウム（第14回）について

大峯評議員から、資料8に基づき、3月20日（水：祝）に開催した自然科学研究機構シンポジウム（第14回）について報告があった。

10) 第2回若手研究者賞授賞式及び記念講演会について

岡田（泰）評議員から、資料9に基づき、6月16日（日）に開催予定の第2回若手研究者賞授賞式及び記念講演会について説明があった。

11) 平成25年度会議日程について

事務局から、資料10に基づき、平成25年度の教育研究評議会の開催日程について説明があった。

12) 機構の最近の研究成果について

本機構の最近の研究成果について、基礎生物学研究所の渡辺 英治 准教授から「メダカの心理物理学」と題して発表が行われ、質疑応答があった。

以上